柏崎栄助と九州クラフトデザイナー協会

Eisuke Kashiwazaki and Kyushu Craft Designer Association

車　政弘　　竹口浩司
Masahiro Kuruma　　Koji Takeguchi

Abstract: Eisuke Kashiwazaki (1910-1986) designed many things from lacquer ware in Okinawa "Bembo" to alumite lacquer, ceramics, glasses, bamboo braiding, and rush mats, but his accomplishments as an organizer of community design efforts are equally significant. The best example of this is his founding of the Kyushu Craft Designer Association and acting as the first director of that association as well as the Kyushu Design Committee. He was the creator of the early stages of the Kyushu and Okinawa design circles. The Kyushu Craft Design Association has now been in existence for 40 years. This is thanks to the fact that Eisuke Kashiwazaki was not only an outstanding designer, but also a fervent supporter of design education, as well as acting as an advisor for the Iwataya Department Store, giving guidance and advice related to distribution and sales, which was also a major contributing factor.

Key words: design movement, Kyushu Craft Designer Association, Eisuke Kashiwazaki

1.はじめに

柏崎栄助(1910-1986)(以下柏崎と略す)は九州にあって、デザイン関係者にさまざまな影響を与えた。その足跡は現段階では不明の部分もあるが、去る2006(平成18)年2月～4月福岡県立美術館開館20周年記念事業として「2005コレクション展Ⅲ」が開催され、柏崎がデザインした作品を特集し「デザイナー柏崎栄助の世界」の展覧会が行われた。この記念展に際し、関係者の証言もいくつか得られている。

すでに「柏崎栄助追悼展と出版の会」が一度展覧会を福岡で開催しているが、現段階で柏崎のデザイン活動を捉えなおしてみたい。柏崎の活動は幾つかの段階があるが、ここでは特に1961(S36)年に発足した九州クラフトデザイナー協会(現・九州クラフトデザイン協会)との関係で彼のデザイン活動を考えてみたい。また、九州クラフトデザイナー協会設立以前の「生活と工芸展」の動向を旧通商産業省産業工芸試験場編『工芸ニュース』を手がかりとして考察する。

柏崎の活動は、例えば未完に終わったが、1940(S15)年、沖縄比謝川流域にリクリエーション施設の計画を旧友福田らと立案、1952(S27)年、沖縄慰霊塔の計画案作成や、1954(S29)年には宮崎県産業観光大博覧会計画案を親友達と作成し、その宮崎県博覧会のポスターのアートディレクションを行うなど、幅広い分野にわたる。そしてデザイン教育の場でも多くの人に影響を与え、後進を育てている。従って九州クラフトデザイナー協会との関係だけでは捉えきれない幅を持っている。

なお、年号の表記は西暦(元号)とする。図版キャプション中サイズを示す数字の単位はcmとする。

2.戦前の柏崎の活動

2.1沖縄漆器「紅房」での活動

紅房社史によると1927(S2)年、沖縄県工業指導所が設立され、染色・織物・陶器・漆器の四部門が設置され、生駒弘が富山県工業試験場から転じて漆工部主任となる。1931(S6)年に漆工芸組合が発足し、その指導者は生駒弘であった。さらに1935(S10)年、漆工芸組合が「沖縄漆工芸組合紅房」の商号を名乗る(注1)。

小池岩太郎が商号「紅房」を命名し、そのマークのデザインも彼が行っている。

商工省工藝指導所が仙台に設立されたのが、1928(S3)年であるから、沖縄はそれに先んじた動きであったということができる。

柏崎は1910(M43)年11月、秋田県本荘市で出生した。柏崎は本庄中学校卒業後、獣医学校に入るが、1928(S3)年18歳の時、美術学校に入りたいと親戚の生駒弘(柏崎は生駒弘の妻の従兄弟)を頼って初めて沖縄を訪れる。生駒弘は東京美術学校図案科を勧め、柏崎は1930(S5)年、入学する。柏崎は美術学校在学中に沖縄を訪れ、漆器のデザインを始める。生駒弘は柏崎を休暇毎に招き、自由奔放にデザインさせ、優れた新鮮な感覚をとりいれ、大胆で斬新な商品を次々に発表した。

こうした柏崎の仕事に興味を持った彼の友人達、小池岩太郎(図案)、後藤光行(彫刻)、福田良一(建築)、今井完樹(絵画)らも夏休みには柏崎に同行して、沖縄を訪れるようになった(注2)。

1935 (S10) 年3月25歳、東京美術学校図案科(現、東京芸術大学美術学部) を卒業した柏崎はこの後も、紅房の漆器デザインを手掛けている。

1936(S11)年から1938(S13)年までのヨーロッパ遊学後も、柏崎は引き続き「紅房」で漆器デザインを手がける。

1938(S13)年の第6回輸出工芸展で「高臺鉢」(紅房出品)「深鉢」(沖縄県工業指導所出品)でカットグラス風の「深鉢」は最高賞を得ている。それらに共通したものはヨーロッパの特にフランスの抽象主義的傾向を表現したものであった(注3)。

1940(S15)年秋の東京銀座の資生堂ギャラリーでの沖縄・紅房展は紅房展とはいっても、製品はすべて柏崎のデザインであったし、椅子の上に漆器を並べるというディスプレイも彼の計画であった(注4)。1941(S16)年1月号の『工藝ニュース』には、作品紹介と、来日中のシャルロット・ペリアン女史のコメントが細かく紹介されている。そして総評としてペリアンは次のように述べている。「今までに見た漆器よりは遙かに良く多分に將来性がある。此の儘でよいとは思わぬが此の態度で推進めていったならばきっとよいものにならう。(注5)」

ここに出展された独特な盛器はモンステラ(*Monstera deliciosa*)という植物の葉の形がイメージされている。貝殻形の皿や、水の波紋、野菜の図を朱の地に深い刻線を施した物など、沖縄の自然のイメージが大胆な漆器として提示されている。ただモンステラは熱帯の植物であり、沖縄で見たものかどうかという疑問は残る。

生駒弘は1940(S15)年、静岡の(株)理研電化工業のアルマイト漆器の研究開発のため工芸部長として転出し、紅房の第二工場としての性格を持つ新工場設立準備を台湾新竹市で開始し、翌年には工場が完成する。生駒弘の後を継ぐため、商工省工芸指導所に勤務していた小池岩太郎が紅房工場長として赴任する(注6)。

理研電化工業の台湾の工場建設とそれに続く時期、戦時下ではあるが、柏崎は台湾に赴いている。1943(S18)年の『工藝ニュース』に「臺灣少年工育成への課題・雑感」という一文を寄せている。「少年工員採用試験に初めて立ち會った時、體力検査の驚くべき結果を見た。」として、精神的、肉体的に最も大事な15歳の少年の育成には事業体(企業)が責任を持って、これに当たることが必要だと強い調子で主張している。この文章の末尾には(筆者は理研電化工業嘱託)となっていることから、工場設立当初から生駒弘を支えていたことが分かる(注7)。この一文に続き、小池岩太郎が「臺灣の生活工藝」と題する文章を寄せている。そこには柏崎からの私信が引用されている。少し長くなるが紹介しておこう。

「臺灣工藝は、沖縄のあのしっかりと根を張った、それは常に切實な生活の中に色取って來られた歴史が齎す自然と生活の深い結合の所産、・・その様なものからは遙かに遠い何かつるりとした根の浅い感じで、-中略-不圖侘びしい瞬間を感じて或る空しさにおそはれる事がしばしばです。

その様な思ひの一方で、此れは並々ならぬ事と、私に課せられた使命を今更に振りかへって覺悟を新たに致します。島産の漆で餅(堆錦餅)も練られる様になりました。顔料も土地の物の研究に手をかけました。-中略-今迄はとても考へられなかった此空氣や、光や、自然のそうした呼吸と私との間

隙の様なもの、此れを寸刻も早く埋め度いと念じてをります。(注8)」

おそらく台湾の新竹に理研電化工業ができて、生駒弘を手伝うために、デザインのみならず、事業体のあり方についても考え、上記のような主張がなされたものと言える。その主張の根底には沖縄・紅房でのさまざまな体験があり、その観点が台湾に適用できるのかという悩みがあったのだろう。

柏崎の主として紅房における漆器デザインの特質は、例えば図１の香水容器は沖縄のクバ笠の形態がイメージされ、紅型のイメージは小箱になり、伝統的な縞柄は手箱に施され(図7,8)、熱帯特有のモンステラの葉のイメージは盛器になるというように伝統的な生活用具から形態が発想され、沖縄特有の装飾性と自然の形態が大きく意識されている。

また、極めて特徴的な形態で、いずれも長手方向で50cmを超える大きさの「足跡形盛器」シリーズは、砂浜に付いた足跡が波打ち際で緩やかなかたちに変わっていく様をじっと見つめ、発想されたものである(図9-1、9-2)。

この特徴的な形態との関連で、森正洋の灰皿の形態が類似した雰囲気を持つものとして注目される(図12)。学生時代の森正洋の作品である。1950(S25)年当時、柏崎は長崎県窯業指導所嘱託として、月に１度は長崎県波佐見に訪れ、五島白土を材料とする「酸化焔焼成による暖かい材質感の陶器の商品化」を目指していた頃である。当時学生だった森正洋は柏崎らが開く「デザイン座談会」に参加している(注9)。有機的な形態の共通項に、筆者は学生であった森正洋が柏崎の沖縄紅房でのデザインについて話を聞かされ、あるいはサンプルを見せられ、衝撃を受けたのではないかと推察している。

柏崎の多くの漆器の椀類は、薄く挽き、デリケートな仕上げとするこれまでのものとは異なり、分厚く、大胆な形態が指向されていることが特徴であろう。

戦争とともに紅房の活動は停止を余儀なくされた。戦後1947(S22)年、有名寛學ら5人くらいで手作りの紅房をスタートさせ、1949(s24)年に沖縄の人たちが中心となって、株式会社紅房を設立し、50

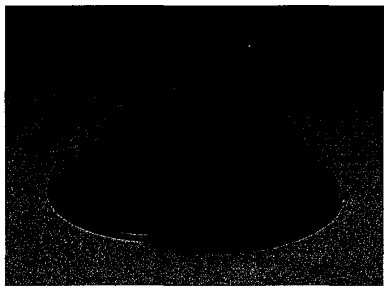


図1　香水容器1935(S10)頃　木地(シタマキ)・漆塗り径13.5高8.4
福岡県立美術館所蔵

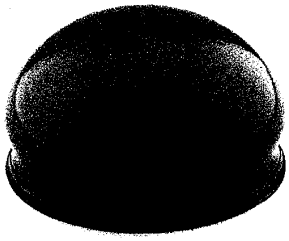


図2　朱漆小物入れ1935(S10)　直径10.6,高さ7.0
福岡県立美術館所蔵

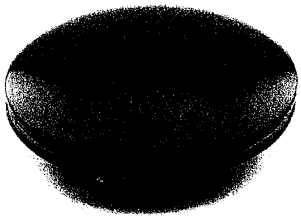


図3　朱漆パフ入れ　発表年不詳　直径10.2,高さ3.7
福岡県立美術館所蔵

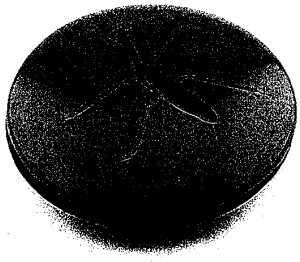


図4　蟷螂文朱漆パフ入れ　発表年不詳　直径10.2,高さ3.7　福岡県立美術館所蔵

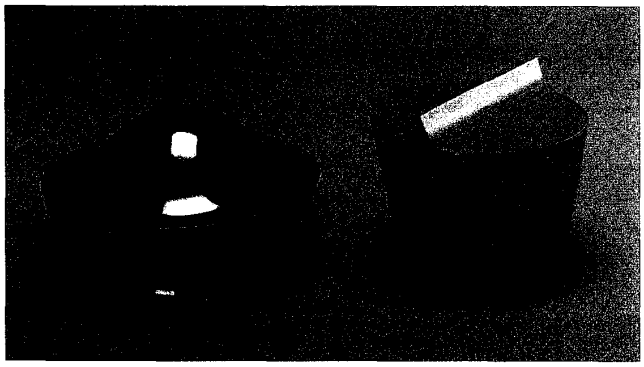


図5　黒漆小物入·朱漆小物入1935(S10)頃　木地・漆塗り径13.5高6.4　1934-42(S9-17)木地・漆塗径10.5高8.2　福岡県立美術館所蔵

図6　縞馬文朱漆煙草入(シガレットケース)1934-42(S9-17)木地・漆塗w13.6,d7.9,h2.6。このデザインは後に第5回九州クラフトデザイン展(1967)にパイプタバコ入れとして出品される。
福岡県立美術館所蔵

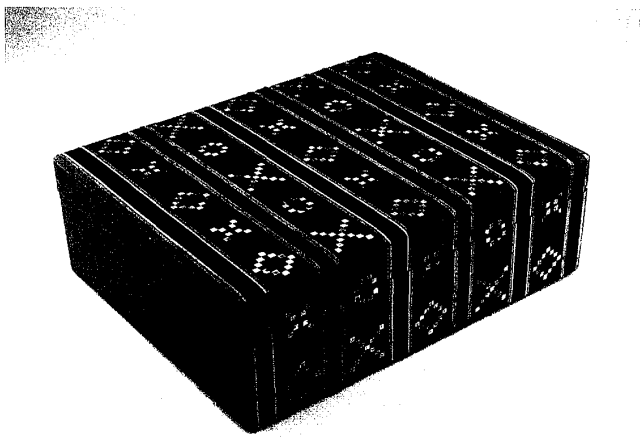


図7　螺鈿文漆手箱2　発表年不詳　幅24.5,奥行き19.3,高さ8.2　福岡県立美術館所蔵

年余りの活動が展開されてきた。しかし、株式会社紅房は2001(H13)年自主解散した。

2.2ヨーロッパ遊学について

1936(S11)年、柏崎は門司港からマルセーユへ船で渡航した。この時、福岡県商工技師として勤務していた小池岩太郎は、柏崎を見送ったという(注10)。

パリ、ベルリン、ウィーン等への遊学のきっかけについては、親友であった増田正次郎は「詳細はよく分からなかった」という。しかし『かみ研』で柏崎の指導を受けていた川村哲司は「フランスの化粧品メーカーか何かのパッケージのコンペで受賞し、その副賞としてヨーロッパ旅行の費用が出たので遊学した。」と柏崎から聞いたことがあると述べている。遊学とコンペ受賞との関係は明確ではないが、図1,2,3は香水入れであり、白粉入れなどはフランスの香水メーカーによるコンペに入賞したものであったという(注11)。

確かに柏崎帰国後の琉球新報1938(S13)年の記事によれば、自らのデザインした小物漆器をウィーンではヨセフ・ホフマンに手渡し(注12)、また、化粧・モード関係の会社にプレゼントしたことが記されている(注13)。琉球新報の記事については、1月28日付「ウヰン・ベルリン・パリ(一)」と1月31日付「ウヰン・ベルリン・パリ(四)」は比嘉明子によって確認されているが、(二)、(三)は残されていない。

漆器と化粧・モードとの関係は、生駒の販路開拓の姿勢とも連動している。「東京は銀座資生堂、伊東屋、京都および神戸の大丸、鹿児島の山形屋などのデパートからも注文をとり、その販売方法についても従来の漆器売場から化粧品売場に展示を変えるなど、漆器のイメージチェンジに予想以上の成果をあげ(注14)」ていることからも、新しい漆器の展開が生駒弘と柏崎らの共通した価値観、目標があったのではないかと考えられる。特に柏崎は1949(S24)年宝雲舎刊『生活の創作』に「表情・化粧・結髪(注15)」という文章を寄せているが、漆器の新しい需要として、コスメティックな領域を

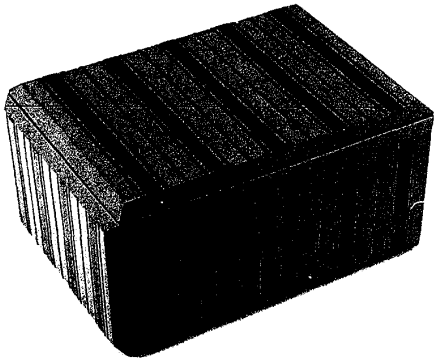
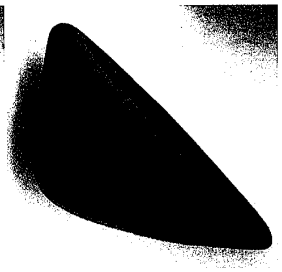


図8　縞文色漆手箱　発表年不詳　幅16.0,奥行き11.8,高さ7.8　福岡県立美術館所蔵

図9-1　足跡形朱漆盛り器5
最大径51.2,高さ5.7
福岡県立美術館所蔵



足跡形朱漆盛り器6
最大径63.3,高さ5.8
福岡県立美術館所蔵

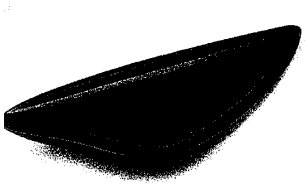


図9-2　足跡形黒漆盛り器
最大径53.8,高さ5.0
福岡県立美術館所蔵

足跡形色漆盛り器
最大径53.o,高さ5.7
福岡県立美術館所蔵

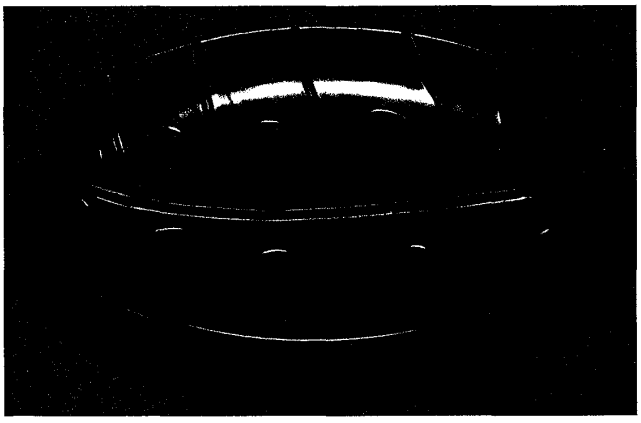


図10　朱漆木葉形盛器1　浦添市美術館所蔵

図11　朱漆木葉形盛器2　径44.0, 高さ4.7
浦添市美術館所蔵

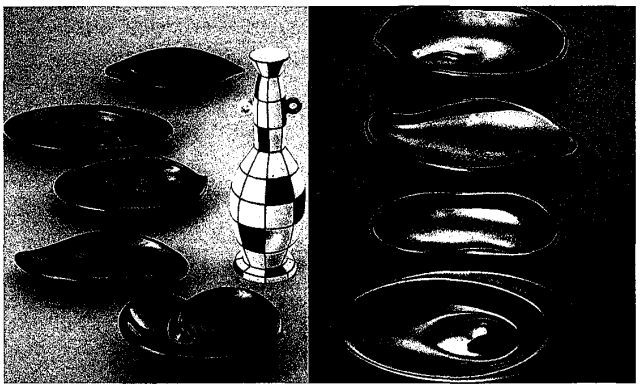


図12　森　正洋　灰皿(1950)　・花瓶(1951)
上：森正洋産業デザイン研究所他編『森正洋陶磁器デザイン展図録』p.5,1997
下：(有)かたち編『陶Vol.14森正洋』p.4,（株)京都書院、1992

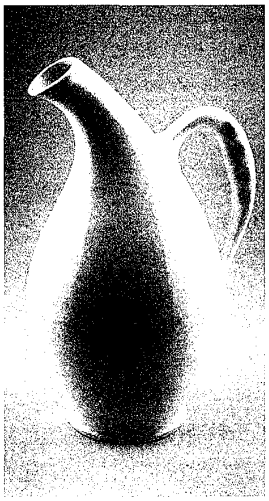


図13　白磁水差し
1950-1953(S25-27)頃
胴径13.1,高さ28.0
福岡県立美術館所蔵

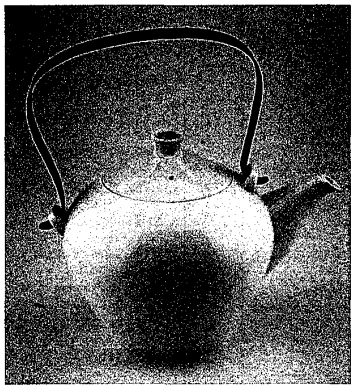


図14　白磁土瓶4
1950-1953(S25-27)頃
胴径13.6,総高（含把手）19.1
福岡県立美術館所蔵

表1. 柏崎略年譜

年(元号)	年齢	事項
1910(M43)		秋田県本荘市で出生。
1928(S3)	18歳	親戚の生駒弘を頼って初めて沖縄へ。
1935(S10)	25歳	東京美術学校図案科(現、東京芸術大学美術学部)卒業。
1936(S11)	26歳	パリ、ウィーン、ベルリン等に遊学。1938(S13)まで。
1940(S15)	30歳	東京資生堂ギャラリーで紅房漆器展開催。
1943(S18)	33歳	安永たゑと結婚。
		理研電化工業株式会社(静岡)でアルマイト漆器のデザイン。
1944(S19)	34歳	中島飛行機製作所・三鷹工場に技術補として勤務。終戦まで。
1949(S24)	39歳	福岡市に定住。
		福岡県福島工業試験場木竹工課嘱託。
1950(S25)	40歳	紅房新店舗建築のため、柏崎栄助を招聘。
		小池新二とともに九州各県の産業視察。
		長崎県窯業指導所嘱託。」アイボリーチャイナ開発に携わる。
		1953(S28)年まで在籍。デザイン座談会は後の九州陶磁器
		デザイナー協会(DAKT)の活動へ展開する。
1952(S27)	42歳	沖縄慰霊塔案を小池岩太郎、後藤光行、福田良一らと計画。
		「生活と工芸展」研修会講師。
1953(S28)	43歳	福岡学芸大学(現・福岡教育大学)非常勤講師。1985年まで。
1955(S30)	45歳	福岡県福島工業試験場の洗濯籠が、第4回生活と工芸展に出品。
1959(S34)	49歳	東京樹脂株会社嘱託。1964(S39)まで。
1961(S36)	51歳	九州クラフトデザイナー協会設立。初代理事長1967(S42)年まで。
1962(S37)	52歳	2月末に第1回九州クラフトデザイン展を岩田屋で開催。
		黒木進が出品者となる14点の器や皿をデザイン。
1963(S38)	53歳	紙造形研究室を作り指導。後の「かみ研」。
		伊勢丹(新宿)研究室嘱託。
1964(S39)	51歳	岩田屋に九州クラフトコーナーできる。DM.01.31
		第2回九州クラフトデザイン展に竹籠(6点)出品。
1965(S40)	55歳	福岡、岩田屋顧問。
		筑後花筵掛川織のデザイン。1970(S45)年頃まで。
		第3回九州クラフトデザイン展に掛川織(5点)出品。
1966(S41)	56歳	第4回九州クラフトデザイン展に掛川2帖(1点)出品。
		九州産業大学芸術学部教授。1967(S42)年頃まで。
		NIC顧問。1973(S48)年まで。
		九州デザインコミッティー初代理事長。
1967(S42)	57歳	第5回九州クラフトデザイン展パイプタバコ入れ、掛川3帖(3点)
		ゆれる容器(大・小)、ゆれる容器平蓋(黒・木地)出品。
1968(S43)	58歳	第6回九州クラフトデザイン展に漆器箱堆錦縞模様(2点)出品。
1969(S44)	59歳	第7回九州クラフトデザイン展にゆれる鉢マット仕上げ
		(大2種・中2種)、保冷容器(クリア・マット仕上げ)
		中鉢、大鉢マット仕上げ、器など(9点)出品。
1970(S45)	60歳	香蘭女子短期大学被服科にデザインコース設置を勧める。
		第8回九州クラフトデザイン展　小鳥の巣(平形)(3点)、
		小鳥の巣(長形)(3点)、灰皿(4点)出品。
1971(S46)	61歳	第9回九州クラフトデザイン展　漆器鉢(3点)出品。
1972(S47)	62歳	第10回九州クラフトデザイン展　マガジンラック、ペン皿出品。
1974(S49)	64歳	第12回九州クラフトデザイン展ガラスの「器」(4点)出品。
1982(S57)	72歳	九州芸術工科大学「芸術と科学」非常勤講師。1984(S59)も。
1983(S58)	73歳	1935(S10)年デザインの漆器、Gマーク商品となる。
1986(S61)	76歳	11月24日逝去。

強くイメージしていたことが理解できる。

パリ万国博覧会は文化大国フランスが「現代生活における美術と技術」をテーマに1937(S12)年5月24日から11月2日まで開催された。はじめて純日本風のデザインを脱した日本館が、パビリオンコンクールでグランプリを受賞している(注16)。

柏崎はパリ万博を見学している。というのは、後に触れるガラスのデザインとの関連で,そのきっかけはこのパリ万博であったのではないかと考えられるからである。

1941(S17)年、和田三造は福岡県の須藤雅路技師と福岡特殊硝子を訪ね、冬場にも使える硝子素地として位置づけている。そして和田三造は柏崎の才能を見込み、柏崎に福岡特殊硝子の仕上げ技術者に形態の指導させている(注17)。

ちなみに1999(H11)年4月末、解散したマルティグラス株式会社は次のような会社の経過を辿っている。

1919(T8)年、直方、植木町に中島硝子製作所として起業。1937(S12)年、パリ万博でグランプリ。柏崎在欧。1939(S14)年、現福岡市の新宮駅前に福岡特殊硝子株式会社として移設。1986(S61)年、社名をマルティグラス株式会社とし、1988(S63)年、福岡県特産工芸品に指定される。1999(H11)年4月末にマルティグラス株式会社は解散した。マルティグラスの従業員は新たにクリスターというガラス工芸の会社を設立したが、社名マルティグラスの名を譲り受け、現在は有限会社マルティグラスとして、その社名は存続している。かつてのマルティグラス株式会社の従業員を中心として、いくつかの企業活動が継続している。

3.生活と工芸展

『第1回生活と工芸展』は1952(S27)年、当時の通商産業省工業技術院産業工芸試験所と朝日新聞社の共催で福岡・天神・岩田屋で開催された。以来、第11回展まで10年間展覧会は継続された。この展覧会の意味と位置づけを考察してみたい。

この展覧会の目的について簡単な紹介記事がある。これによると「住の問題がとやかくいわれだし、近代生活のあり方が人々の深い関心の的とな

表2. 生活と工芸展年譜及び関連事項

年月日	事項	開催会場	工芸ニュース巻号頁
1952(s27)2/13-17	第1回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.20 No.3 p.39
1953(s28)3/9-15	第2回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.21 No.5 p.39
1953(s28)3/24-30	第1回生活工芸展	銀座松坂屋	Vol.21 No.7 p.45
1954(s29)3/17-22	第3回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.22 No.5 p.40
1954(s29)6/11-16	生活工芸展	銀座松坂屋	Vol.22 No.8 p.29
1954(s29)7/18-22	静岡生活工芸協会発足	静岡市松坂屋	Vol.22 No.3 p.27
1955(s30)3/15-20	第4回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.23 No.6 pp.16-18
1955(s30)6/10-15	第3回生活工芸展	銀座松坂屋	Vol.23 No.8 p.45
1955(s30)9/6-11	西九州陶磁器デザイナー連盟	福岡岩田屋	Vol.23 No.10 p.48
1956(s31)3/13-18	第5回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.24 No.5 p.40
1956(s31)3/13-18	第3回全九州家具コンクール	福岡玉屋	Vol.24 No.7 pp.49-50
1956(s31)9/5	日本デザイナー・クラフトマン協会設立		Vol.24 No.8 pp.38-39
1957(s32)3/19-24	第6回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.25 No.4 pp.49-50
1958(s33)3/18-23	第7回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.25 No.4 pp.60-61
1958(s33)6/13-18	生活工芸展	銀座松坂屋	Vol.25 No.6 p.57
1959(s34)3/3-8	第8回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.27 No.3 pp.48-49
1960(s35)3/15-20	第9回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.28 No.4 pp.52-53
1960(s35)12	今日のクラフト展	クラフトセンター	Vol.29 No.2 p.61
1961(s36)3/14-19	第10回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.29 No.4 p.55
1961(s36)6/9-16	日本ニュークラフト'61 (第2回)	銀座松屋	Vol.29 No.6 p.55
1961(s36)9/15-20	第8回全九州家具コンクール	福岡玉屋	Vol.29 No.8 p.54
1961(s36)10/10-15	第3回西日本試験所クラフト展	博多大丸	Vol.29 No.8 p.55
1962(s37)2/20-2/25	第11回生活と工芸展	福岡岩田屋	Vol.30 No.1 p.60
1962(s37)2/27-3/4	第1回九州クラフトデザイン展	福岡岩田屋	Vol.30 No.1 p.60
1962(s37)9/14-19	第9回全九州家具コンクール	福岡玉屋	Vol.30 No.4 p.57
1963(s38)5/31-6/5	63日本ニュークラフト展	銀座松屋	Vol.31 No.3 p.60

ってきたことに応えて、先年2月産業工芸試験所主催で第1回生活と工芸展が九州・福岡市で開かれ、多大な反響を呼んだ(注18)」。つまり住生活デザインの方向性を提案していこうとする意図があったのである。

第3回展の会場はモデルルーム(約10室)、陶磁器・木・竹・繊維個別展示場、産業工芸試験所展示場と大別して3群に分けられた。内容は産業工芸試験所九州出張所設計のモデル・ルーム(アパートの居間の一部)があり、家具類は、材料規格と家屋寸法に合わせてあり、組合せ式、または解体式になっている。

長崎県窯業指導所・長崎県美術工芸陶磁器研究所出品の陶磁器展示場の一部の写真が工芸ニュースに掲載されている。これは展覧会場入り口正面のディスプレイにもなっている。

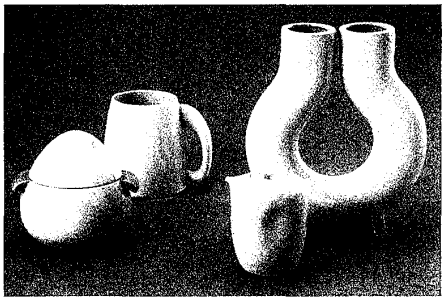


図15　森正洋　長崎県窯業指導所時代1955(S30)
森正洋産業デザイン研究所他編『森正洋陶磁器デザイン展図録』p.5,1997

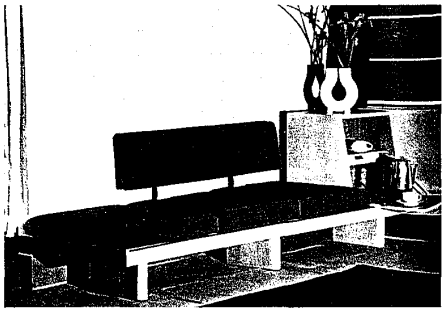


図16
第4回生活と工芸展記事より

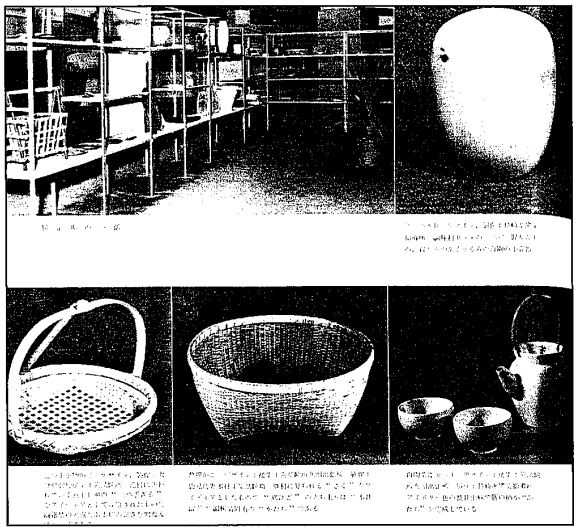


図17　第4回生活と工芸展記事より

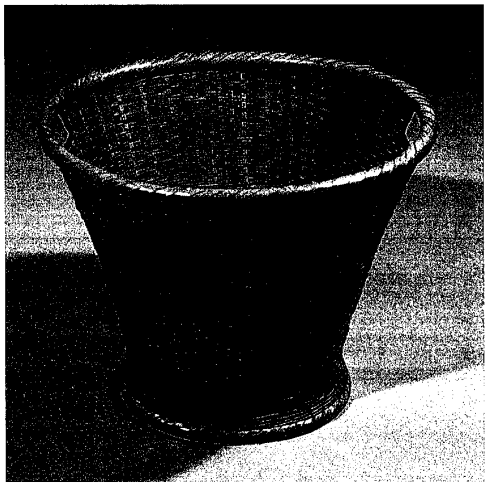


図18　竹籠　1949(S24)　柏崎　口径44.0×41.2, 高さ37.6　福岡県立美術館所蔵

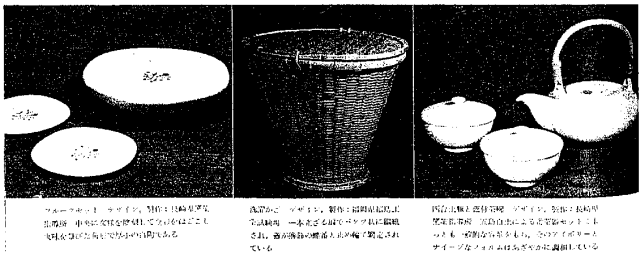


図19　第4回生活と工芸展記事より

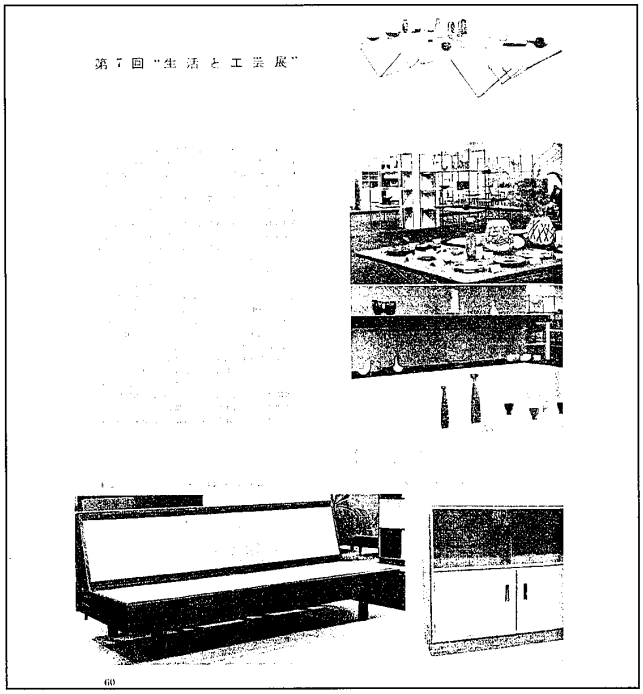


図20　第7回生活と工芸展記事より

図21　第10回生活と工芸展記事より

第4回展の概説には「今回は協同製作による二つのモデルルームを構成し、他は品種別に観賞しやすい展示方式をとって余裕ある会場としたことが好評であった。-中略-産業工芸の振興と生活文化の向上に資することを念願としたいものである。(注19)」とある。

第4回展で注目すべき２つの点が挙げられる。１つは森正洋が長崎県窯業指導所にいた頃の五島白土による試作品が２点展示されていることが確認できることである。ひとつは花器(図15,16)であり、

もう一つは「G型しょうゆ差し」の原型となった「ソース入れ」(図15、17)である。さらに柏崎が福岡県福島工業試験場で指導した竹網籠が「洗濯籠」として展示されていることである。福岡県立美術館に寄贈された竹籠には蓋は付いていないが、第４回展の記事の写真では蓋が付いている(注20)(図18,19)。

第5回展の概要は次の通りである。「第1部は九州および山口各県市の18公設試験研究機関の研究試作品と国立名古屋工業技術研究所および産業工芸試験所の研究参考出品併せて200余点。第2部は今回新しく一般公募を行い、応募作品96点のうち審査のうえ入選50点を決定して、このうち優秀作品17点を表彰した。(注21)」とあるように第２部の審査が行われるようになったことが特徴であろう。

第6回展は第1部九州地区官公設試験機関試作品243種、324点、第2部一般公募入選作品115点で、IAI巡回展が同時開催されている。この巡回展については産業工芸試験所の昭和31年度の事業で計画されたものである(注22)。

第7回展は第1部が公設指導機関の試作品と海外参考品で、家具、小木工品、竹工品、陶磁器など約400点が出品され、各県出品試作品に対し最優秀賞が設けられ、大分県日田産業工芸試験所の漆器製品が受賞している。会場中央には福岡県住宅協会設計の標準住宅のモデルハウスが設けられ、各県工試の担当で各室の家具などが並べられた。第2部は一般公募の作品で応募総数172点、入選123点、工業技術院長賞以下７種の賞が授与されている(注23)(図20)。

第８回展は「アパート生活」をテーマとし、アパートのモデルルーム３室が設けられた。第1部は家具、金工、竹工、漆器等144種、301点、第2部は応募104点の中から83点が出品され、この他産業工芸試験所の海外収集品7点を含む61点の参考品が展示された(注24)。

第9回展は第1部の出品が139種275点で、第2部一般公募入選作品80種176点の他、海外工芸蒐集品を含む産業工芸試験所参考作品64種84点であった(注25)。

第10回展は第1部185種489点、公募作品112種123点、産業工芸試験所および名古屋工業技術試験所参考出品44種95点、その他日本手工芸品対米輸出推進計画に基づく選定品108種112点が展示され、講演会やその他10回目の記念行事的企画が盛り込まれている(注26)(図21)。

第11回展は第1部263点、第2部120点、参考品80点、合計463点(267種)の出品であった(注27)。第11回生活と工芸展の開催日時は表2の通り1962(S37)年２月20日から25日までで、この展覧会終了の翌々日に第1回九州クラフトデザイン展が開催されている。表2から読み取れるのは第１に家具のような大型のものと、小型の生活用品、インテリアエレメントの展示が同じ会場では、見せ方に相当工夫が必要だという問題点もあったであろう。そして、すでに生活と工芸展に並んで、家具コンクールも定着していたことが挙げられる。1962年には第9回目の全九州家具コンクールが福岡玉屋で開催されている。その前年の全九州家具コンクールには福岡の室内デザイナーグループが賛助出品をしているように、インテリアデザインとクラフトデザインの活動が分岐したという見方ができよう。

更に1956(S31)年には日本デザイナー・クラフトマン協会が設立され、銀座松屋やクラフトセンタージャパンを拠点とする活動も九州クラフトデザイナー協会設立のもう一つの背景であろう。

組織的に産業工芸試験所が主導する活動スタイルからの脱皮の要素も見逃せない。

4.竹の編組についての柏崎のデザイン

第４回生活と工芸展に出品された福岡県福島工業試験場の洗濯籠と福岡県立美術館所蔵の２点の竹籠があるが、竹の作品については1948(S23)年に「私の竹の仕事(注28)」という一文が参考になる。その内容をかいつまんで紹介してみよう。

「一昨年設計した東京のあるサロンの間仕切りに竹編みを使ったのが機縁で、デザイナーとして初めて竹という素材に逢って以来、未だ本当の友

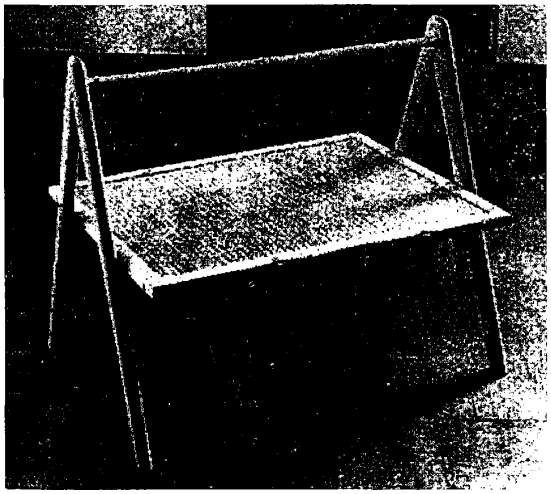


図22. 竹の編組のサイドテーブルの甲板（8号イロハ）

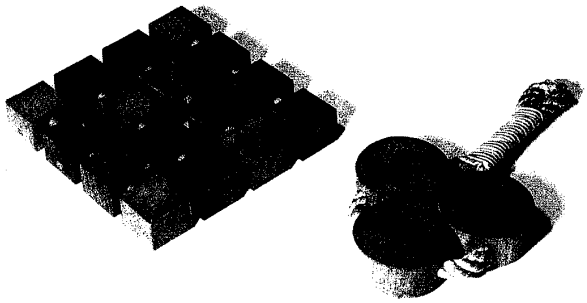


図23　土瓶敷き　那賀清彦
第2回九州クラフトデザイン展1964（S39）より

達になり切れず、相当苦痛の種になっている。」としながら、竹の編組のテストピースを作成している。その上で適用できる案を次の通り、カタログ化している。

1号イ・成形編組の帽子
1号ロ・テーブルマット
2号イ・電蓄キャビネットのスピーカーカバー
3号イ・1.5m×2.4mの広さの室内間仕切り
3号ロ・夏の窓スクリーン
3号ハ・夏の窓スクリーン
3号ニ・夏の窓スクリーン
3号ホ・ファイヤースクリーン（外人からの注文による）
3号へ・同上
8号イロハ・サイドテーブルの甲板各種（図22）
9号イロハ・額縁のマット
10号イロ・子供寝台の底張りと、椅子の座張り及び背張り

「成型編組の方は丸型と楕円型に限り、洗濯籠の各種類と揺籃、屑籠、玩具籠等、籠類だけを作っている。健康な商品として、出来るだけ広く家庭におくり出せるものを作りたいものと考えている。」とある。そして「一年に約１ヶ月ずつ、２度の九州滞在中のスケジュールに、竹の面を割り当てているので、歩みがのろいが、漸次出来上がって行く姿に、限りない愛着を感じ、それらの一つ一つが、持ち主の家庭や、それのある所の光になって欲しいと、心ひそかに念願する。」と結んでいる。

従って戦後まもなく竹工芸の世界と出会い、その素材の展開の可能性を探っていたことが分かる。そうした活動が1950（S25）年の福岡県福島工業試験所嘱託という立場につながっている。

5.九州クラフトデザイナー協会の設立と活動の経過

塩塚豊枝は九州クラフトデザイナー協会設立の経緯について次のように記している。

「昭和27年、産業工芸試験所と朝日新聞社共催の〈生活と工芸展〉が福岡岩田屋で開催された。試験場を中心にその指導作品が、家具から食器に至るまで展示され、まだ戦後の貧しい時代、デザインされた商品も殆どない時代だけに大変な反響を呼んだものであった。この展示会は以後12（ママ）年間続き、啓蒙の面でも、更には企業の意識に大きい影響をもたらしたものと思う。然しながら当時は、特にデザインについて試験場への依存度が高く、それには自ら限度があった。私たちはデザインの質を高めるため相互に勉強しあう団体をつくり、若い人たちの参加を求めていく、そして優秀なデザイナーの輩出を図ることが必要、というのが協会設立の動機であったと思う。

柏崎さんは自由な立場で、自由な探求と、発想を身上としている人だから、団体結成に参加してくれるか危ぶんだが、意外にも、非常な賛意を示

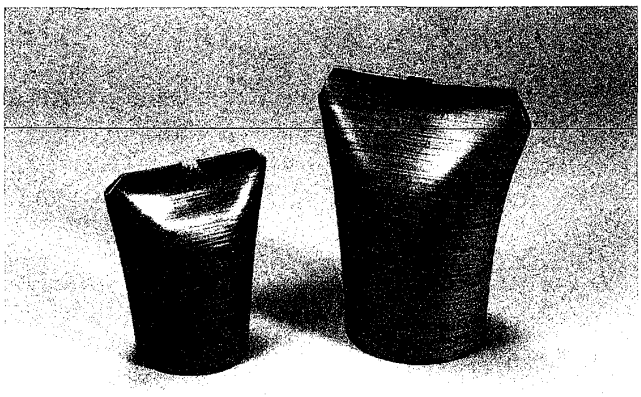


図24　竹曲げ薬味入れ　秋貞真治
第2回九州クラフトデザイン展1964(S39)より

図25　キャンディー入れ　塩塚豊枝
第3回九州クラフトデザイン展1965(S40)より

し、理事長まで引き受けてくれた。(注29)」
この引用から分かる通り、塩塚豊枝は大分県日田産業工芸試験所所長として九州クラフトデザイナー協会設立を考え、柏崎はそれに賛同したのである。

設立発起人は塩塚豊枝・柏崎・松宮寛明・那賀清彦・井上規・森正洋・岡本栄司の７名で、設立総会は1961(S36)年10月1日に行われた。規約の審議、役員選出、昭和36年度収支予算案審議がなされ、理事長：柏崎、常任理事：森正洋、事務局：塩塚豊枝、理事：那賀清彦・井上規、監事：松宮寛明・岡本栄二で正会員17名、準会員18名、総数35名の会員でのスタートだった。

協会発足時のことを柏崎は次のように述べている。

「通産省、産業工芸試験所、ジェトロといったところが一体となってラッセル・ライト計画(注30)をたてた。日本全国から優秀な工芸品を発掘し、それを海外に紹介した時代であった。-中略-私も、その第1回の時に九州地区の担当として発掘に歩いた。

そのような背景の後で、東京松屋のグッドデザインコーナーとかクラフトセンタージャパン、あるいは日本クラフトマン(・デザイナー)協会などが続々と誕生して、九州にも勧誘がありましたが、その頃は九州は九州独自でやろうではないかということを基本にして私達のKCDAが36年に生まれたわけです。-中略-そのうちに、協会の行事としては展示会ともうひとつクラフトコーナーを作った。これは岩田屋からの話で「九州のクラフトを一堂に集めて販売するコーナーを作りたいが、どこにどんなメーカーがあるか協会でリストを作って紹介してほしい。」と言って来ましたが、こちらは「只それだけでは困るので独立したコーナーを作るならば応援しましょう」と返事をして、岩田屋もそれを納得して特設コーナーが生まれた。(注31)」

柏崎のデザイン活動、クラフトデザイン活動のフィロソフィーとして常に『健康』という言葉を用いていた。
「地域と密接に結びつく『健康』なデザイン活動、国際的な文化技術の交流と『健康』な作品づくり、新時代を築く活力としての『健康』な環境、豊かなゆとりと生活への『健康』な協会の運営。先生（柏崎のこと）はこの様にすべての基本を『健康』という言葉で表現されました。(注32)」と田中吉定が述懐するように、協会の運営も当初から『健康』というキーワードが大きかったということができる。

第１回九州クラフトデザイン展（福岡展）開催要綱には開催趣旨として次のように述べられている。
「九州はクラフトの宝庫とさえ言われています。それは古くから地理的、歴史的或いは資源的に特色ある工芸が生産され、その伝統が今もなお脈打っ

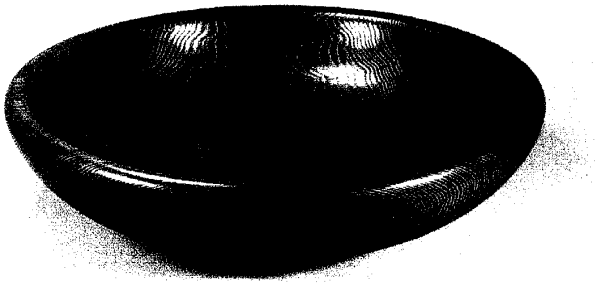


図26　焼き杉鉢　塩塚豊枝
第4回九州クラフトデザイン展1966(S41)より

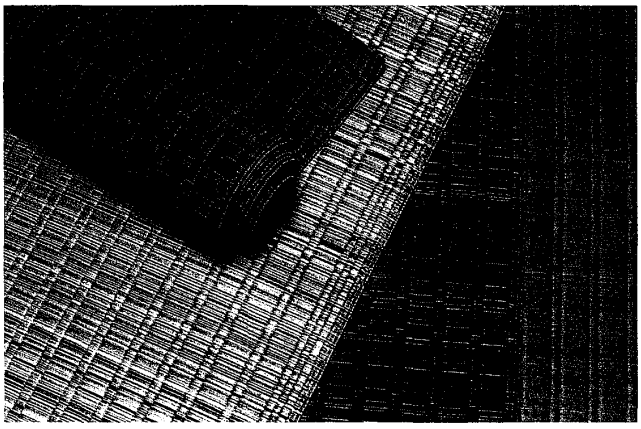


図28　筑後花筵・掛川織　柏崎
福岡県立美術館所蔵

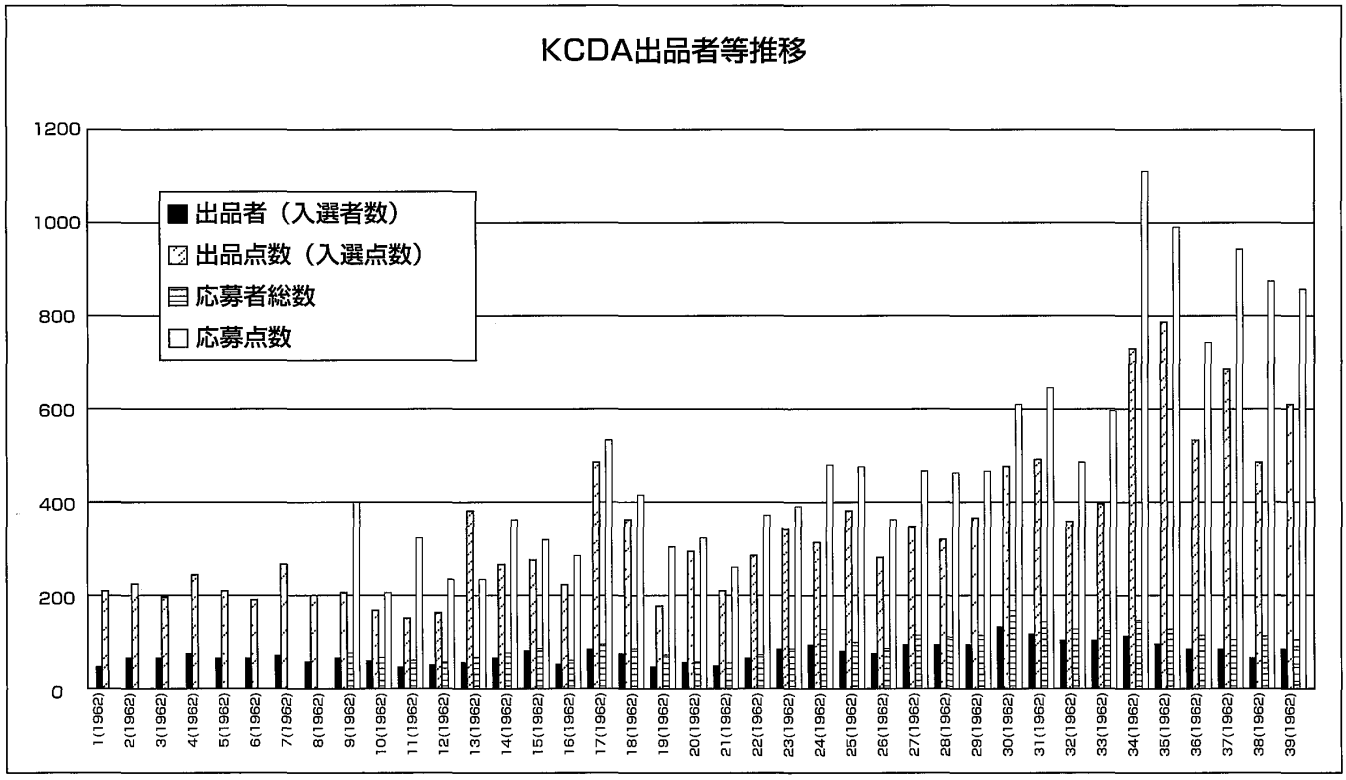


図27　九州クラフトデザイン展第1回展から39回展までの出品者等推移

ているからでしょう。このように伝統に育まれた私たちは現代の生活に“用具としてまた商品として”どう対処すべきか、これは私たちに課せられた大きな問題だと思っています。この問題と取り組み実践を通して努力するため、先に九州クラフトデザイナー協会を設立しましたが、その仕事のひとつとして第１回九州クラフトデザイン展を開催することになりました。(注33)」

そして第１回展のデザイナー47名、会社、個人等に分かれるが出品者45で、出品者とデザイナーの区別がはっきり意識されている。出品点数204点であった。第１回展は会員が出品作品を選定するとなっており、審査ということばは使われていない。

第2回展の出品デザイナーは64名、出品点数は225点で、第７回展をピークに出品者、出品点数と

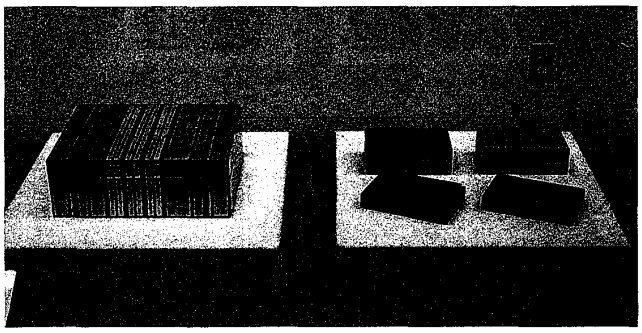


図29　漆器箱堆錦縞模様　柏崎「デザイナー柏崎栄助の世界展」展示より
左の作品は第6回九州クラフトデザイン展1968(S43)に出品されている
福岡県立美術館所蔵

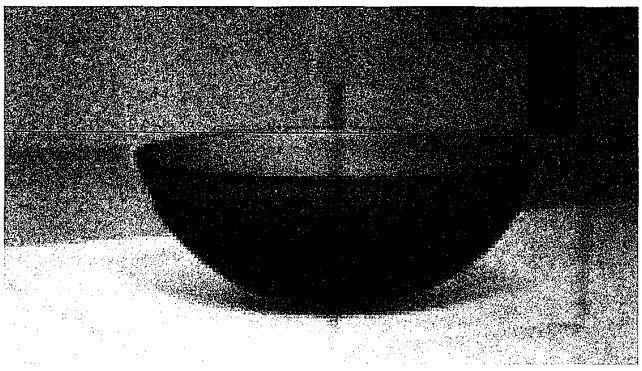


図30-1　ガラス鉢(ゆれる器)　柏崎「デザイナー柏崎栄助の世界展」展示より
第7回九州クラフトデザイン展1969(S44)に出品されたものの1

もに漸減傾向で第10回展では朝日新聞で「気になるサロン化　原点に返り、問い直せ」の見出しで批判がなされている。「しかし十年の間には、いろんな問題や矛盾も育ってきた。たとえば「ハンドクラフト（手工芸）かクラフトデザインか」というクラフトデザインのあり方をめぐる考え方の混乱だ。文字通りのクラフトデザインなら、デザイナー以外でも容易に複製でき量産できるものでなければならぬはずだが、複製がむずかしい一品制作的なものや、デザインよりも手仕事で勝負するといった作例がふえているのだ。単なるデザインより手仕事を尊重する世間の通念や、その生産体制の中にデザイナーを受け入れようとしない九州工芸界の保守的体質の反映もあろうが、この際、クラフトデザインのあり方を原点に帰って問い直すべきだろう。また、生活に密着した実用性本位のデザインより、会場効果をねらった展覧会主義的作品が目立ってきたのも気になる。現代における生活用具のあり方についての提案といったものが、ほとんど見られぬのも物足りない。発足当初の運動的エネルギーが衰え、サロン化してきたのではないか。(注34)」という指摘である。10年を経過して九州クラフトデザイナー協会の活動は転機を迎える。

1970年代は第２世代の活躍でもう一つの峰が築かれるが、この主要な要因は、テキスタイルやジュエリーの「都市型クラフト」を志向する会員の増加によるものである。

1980年代は「スタジオクラフト型」のクラフトマンが増加し、その活躍で全体として毎年の公募展と、各地で行われる「地方展・企画展・会員展」の展開があった。その後90年代は年次公募展の出品点数は増加し、会員の増加も見られたが、そのため協会の運営が一部の会員に集中するという内部の問題も顕在化した。同時に公募展の開催を支援してきた百貨店の経営が困難になり、第39回展をもって福岡・天神岩田屋での開催は終了する。第40回公募展を熊本県伝統工芸館で開催したが、これ以降、従来の年次公募展は開催されていない(図27)。

第10回展で指摘された問題点はその後も同様であり、矛盾を抱えたままの運動であったのではないかと考えられる。

協会設立後、会員相互の情報交換の場として「KCDA NEWS」が発行されるが、1966(S41)年から編集局は那賀清彦で6号まで継続し、1968(S43)年以降中断している。1971(S46)年復刊し、編集は宮崎珠太郎、早野久雄、後藤哲二郎、川村哲司が担当し、1979(S54)年までに12号が発行されている。こうしたニュースの発行の初期には、公務員会員が相当努力して継続させたことが窺える。こうした中核メンバーの努力によって協会は継続してきたということができよう。

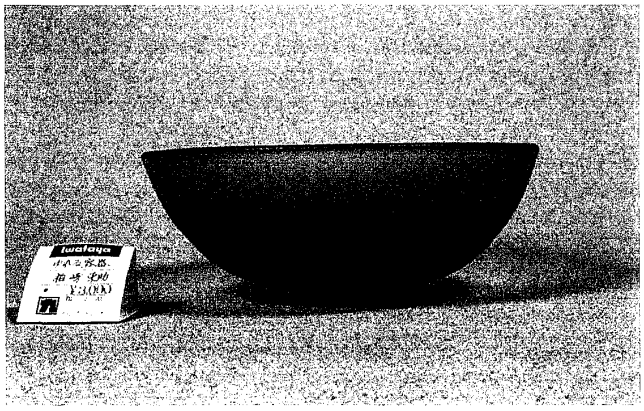


図30-2　ガラス鉢（ゆれる器）柏崎
第7回九州クラフトデザイン展1969（S44）より

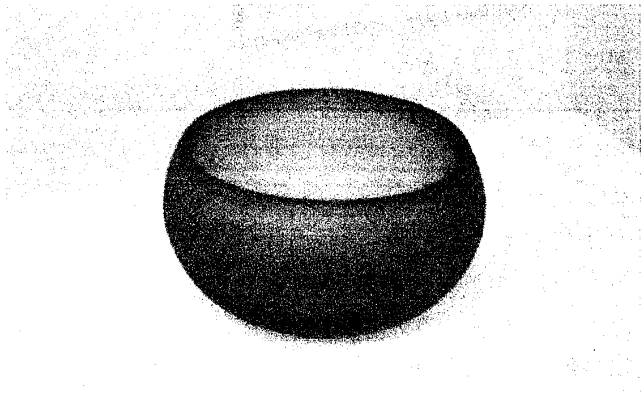


図30-3　ガラス鉢（ゆれる器）柏崎　「デザイナー柏崎栄助の世界展」展示より
第7回九州クラフトデザイン展出品されたもの
1969（S44）

6.九州クラフトデザイン展における柏崎の出品作

第1回九州クラフトデザイン展には柏崎はデザイナーと出品者が異なる出品の仕方であった。デザイナーは柏崎で出品者は宮崎県の森木工所と宮崎県産業奨励館の黒木進である。しかし、その後はデザイナーと出品者は個人柏崎となっている。企業のデザイナーの場合、出品者は企業となるケースが一般的だが、柏崎の場合、組織には属せずという生き方であったため、出品者も同一人というスタイルを採ったのであろう（表３参照）。

第1回展出品作については写真等の資料はないが、いずれも宮崎県で製作された木工品であった。第2回展には竹籠6点が出品されているが、1948（S23）年以来の福岡県福島工業試験所での試作が

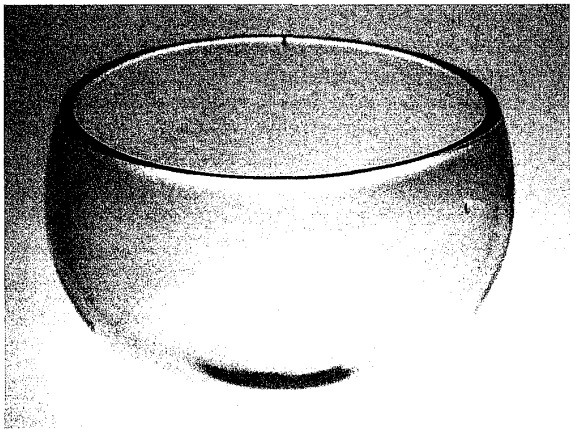


図30-4　ガラス鉢（ゆれる器）柏崎
柏崎栄助追悼展と出版の会編『柏崎栄助　その個性と地場のデザイン』p.14
第7回九州クラフトデザイン展1969（S44）出品

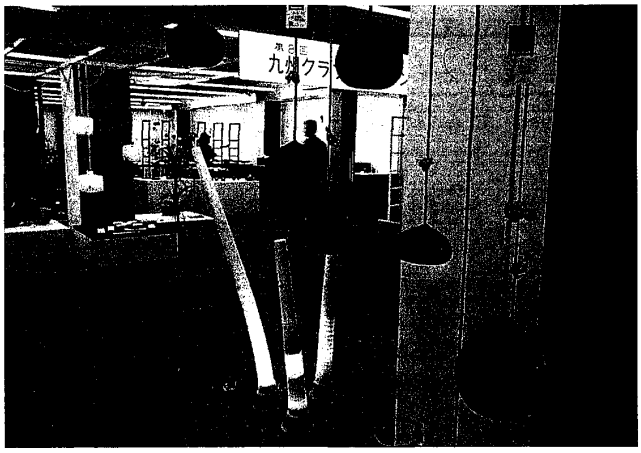


図31　小鳥の巣　柏崎　第8回九州クラフトデザイン展1970（S45）より

もとになったシリーズであろうと推定できる。第4回生活と工芸展に出品された洗濯籠を基本にしたものであろう。製作は福島工業試験所の木竹工課の横田良作が関係している。

第3回から第5回展まで筑後花筵、掛川織が出品されている。これらの作品には「花畑」、「れんげ畑」、「浅海」、「深海」、「おぼろ月夜」などの景色がイメージされている。このデザインと製作過程について、福岡県農業試験場筑後分場の田中忠興は「昭和39年の秋から40年の春にかけて制作された10余枚のスケッチが届けられた。スケッチはパステルを2色から5色ほど塗り重ねられた色感豊かな情感あふれるばかりのもので、花筵にはついぞみなかった感性に満ちたのもであった。しかも、その当

図32　果物鉢・ボウル　伊差川新
第8回九州クラフトデザイン展1970（S45）より

図33　中皿　後藤哲二郎
第8回九州クラフトデザイン展1970（S45）より

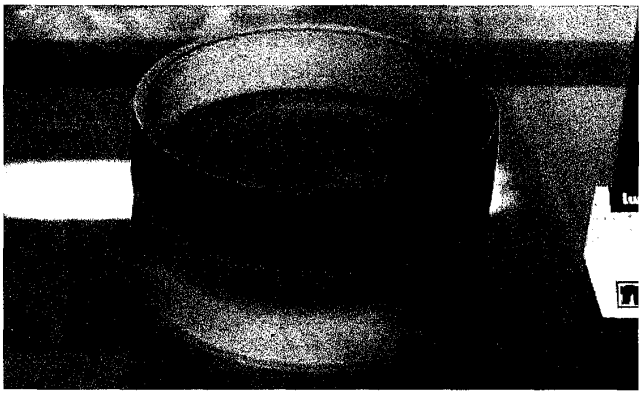


図34　灰皿　柏崎
第8回九州クラフトデザイン展1970（S45）より

図35　果物皿　高光俊信
第10回九州クラフトデザイン展1972（S47）より

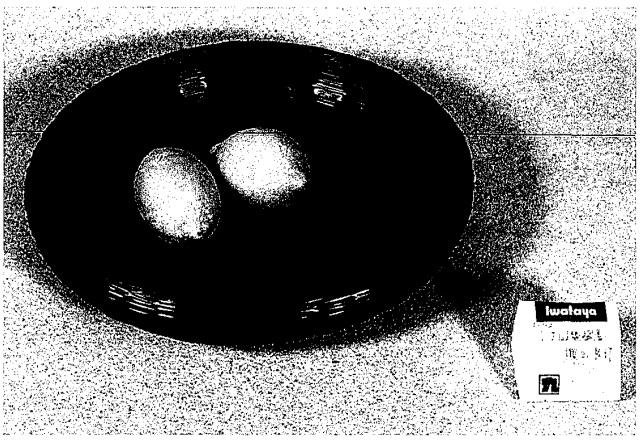


図36　ランタイ返縁盛器　横田良作
第10回九州クラフトデザイン展1972（S47）より

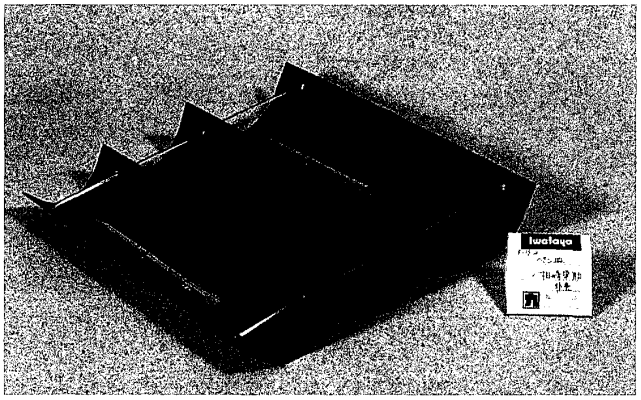


図37　ペン皿（紙）柏崎
第10回九州クラフトデザイン展1972（S47）より

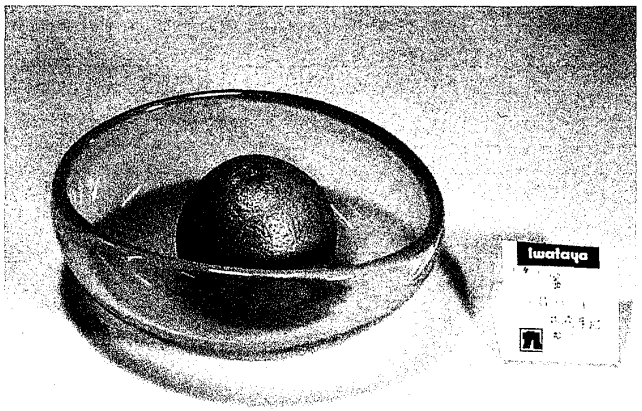


図38　器3　柏崎
第12回九州クラフトデザイン展1974（S49）より

表3. 九州クラフトデザイン展出品、柏崎の作品

回	開催年	作品名	デザイナー	出品者
1	1962(s37)	茶托	柏崎栄助	森木工所・宮崎
		中皿	柏崎栄助	黒木進
		豆皿	〃	〃
		鉢（1）	〃	〃
		鉢（2）	〃	〃
		トレーA-1	〃	〃
		盛皿（B-1）	〃	〃
		盛皿（B-2）	〃	〃
		盛皿（B-3）	〃	〃
		碗（C-1）	〃	〃
		盛器（D-1）	〃	〃
		盛器（D-2）	〃	〃
		盛器（D-3）	〃	〃
		茶托（E-1）	〃	〃
		角形盆及び銘々皿	〃	〃
2	1964(s39)	竹籠丸形六つ目	柏崎栄助	柏崎栄助
		竹籠丸形麻の葉	〃	〃
		竹籠楕円六つ目	〃	〃
		竹籠楕円麻の葉	〃	〃
		竹籠平楕円六つ目	〃	〃
		竹籠平楕円麻の葉	〃	〃
3	1965(s40)	掛川二帖	柏崎栄助	柏崎栄助
		掛川二帖	〃	〃
		掛川二帖	〃	〃
		掛川二帖	〃	〃
		掛川二帖	〃	〃
4	1966(s41)	掛川二帖	柏崎栄助	柏崎栄助
5	1967(s42)	掛川三帖	柏崎栄助	柏崎栄助
		掛川三帖	〃	〃
		掛川三帖	〃	〃
		掛川三帖	〃	〃
		パイプタバコ入れ	〃	〃
		ゆれる容器（大・小）	〃	〃
		ゆれる平薹（黒・木地）	〃	〃
6	1968(s43)	漆器箱堆錦縞模様	柏崎栄助	柏崎栄助
		漆器箱堆錦縞模様	〃	〃
7	1969(s44)	ゆれる鉢マット仕上げ（大）	柏崎栄助	柏崎栄助
		ゆれる鉢マット仕上げ（中）	〃	〃
		ゆれる鉢マット仕上げ（大）	〃	〃
		ゆれる鉢マット仕上げ（中）	〃	〃
		保冷容器	〃	〃
		保冷容器マット仕上げ	〃	〃
		中鉢	〃	〃
		大鉢マット仕上げ	〃	〃
		器	〃	〃
8	1970(s45)	小鳥の巣（平形）	柏崎栄助	柏崎栄助
		小鳥の巣（平形）	〃	〃
		小鳥の巣（平形）	〃	〃
		小鳥の巣（長形）	〃	〃
		小鳥の巣（長形）	〃	〃
		小鳥の巣（長形）	〃	〃
		灰皿	〃	〃
		灰皿	〃	〃
		灰皿	〃	〃
		灰皿	〃	〃
9	1971(s46)	漆器鉢B	柏崎栄助	柏崎栄助
		漆器鉢C	〃	〃
		漆器鉢D	〃	〃
10	1972(s47)	マガジンラック（紙）	柏崎栄助	柏崎栄助
		ペン皿（紙）	〃	〃
11	1973(s48)			
12	1974(s49)	器1,2,3,4	柏崎栄助	柏崎栄助

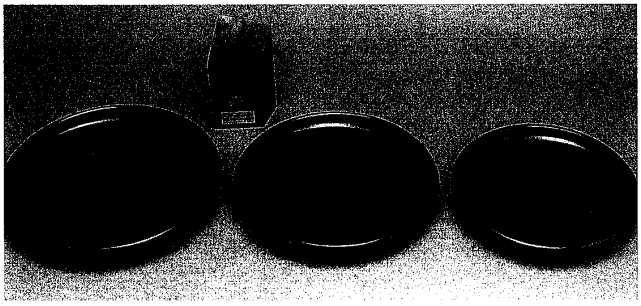


図39　鉄鉢型果物皿(グッドデザイン部門別大賞)
株式会社「紅房」社史編集委員会編『紅房社史』p.16より

図40　九州クラフトデザイナー協会名誉会員証贈呈
1985(S60).12

時の掛川の織機は2色しか織り込むことのできない幼稚なものであったため、製織前に混色して色数の制約をのり越えるというコロンブスの卵的発想の画期的なものであった。(注35)」と回想している(図28)。

第6回展出品の「漆器箱堆錦縞模様」2点はアルマイトがベースになっているところから、理研電化当時の技術が使用されているようである(図29)。

第7回展の「ゆれる鉢」シリーズは当時の話題作であった。安定すべき鉢が揺れるということの新鮮さは多くの人が語るところである。(図30-1,2,3,4,)

当時の柏崎の「ゆれる鉢」の揺れ方の要求は「緩やかに、穏やかな動きの揺れ」であった。これが製作側にとっては難しいことであった。ゆっくりと揺れる状態をつくるためには底の部分の仕上げに時

間が掛かり、しかも値段を当時の表示価格の3倍程度にしなければひきあわないという実態があったという。

当時、福岡特殊硝子(株)のデザイナーだった後藤哲二郎は岩田屋の顧問室に行き、「ゆれる鉢」の生産停止を申し出たという。そんなに高価になったら、庶民の生活の中に入らないものだということで、柏崎は了承した。ちなみにその後第12回展には小振りなガラスの器が4種類出品されている。ひとつの反省からの提案であったと考えられる。

また第8回展には「小鳥の巣」が出品されているが、これも新鮮な驚きを与えるものだった。森正洋は「柏崎さんのデザインによる赤土で作ったやきものの〈小鳥の巣〉が出品された。木の枝につるして使用するやきものの小鳥の巣に、その使われかたに感心して買い求め、家の柿の木につり下げて使用してからもう10年以上もたっている。柏崎さんの詩が、デザインが、生き方が感じられる(注36)」と述べている(図31)。

第13回展以後、柏崎の出品はないが、展覧会の準備では、若い会員に混じって作業を行う柏崎の姿があった。柏崎が育てた「かみ研」のメンバーが九州クラフトデザイン展で多く出品し、その運営にも活躍する時代となっていた。

1983年には戦前、沖縄紅房でデザインした「鉄鉢型果物皿」がグッドデザイン部門別大賞を受賞している(図39)。

かつて国井喜太郎産業工芸賞受賞を辞退した柏崎は内々の九州クラフトデザイナー協会名誉会員証贈呈の折には喜んで出席している(図40)。

7.柏崎のデザイン観とデザイン活動

結びにかえて

柏崎のデザイン観を決定したのは、言うまでもなく沖縄での活動である。そして『沖縄日記』に記されたように毎年の夏、沖縄の島々を旅することが続けられた。八重山群島波照間島での日記。「すべての創造活動は、生きるという基本から始まる。人間に対して、目を開かせてくれたのは、小池岩太郎だ。おそらくそれまでの私は唯、ものの現象だけに目を向け終わっていたようだ。小池にめぐり会ったのは生涯の幸福であり、感謝して余りある。小池ありがとう。私はデザイナーという技術家としての突込みに走っているが、人間が生きることからデザイナーの仕事は始まるのだ。それを、この身でしっかり受け止めたい。社会生活に本当に役立つものを作りたい。この島の人にも役に立つ何かを残したい。だが解らない。(注40)」と呟く。『沖縄日記』からキーワードをいくつか取り出してみると、漂泊への憧憬、自然との対峙・受容、健康、協力・協働、交流ということになろう。

若き柏崎がデザインをして、地域の工芸技術を現代社会に適用しようとした時代はそのまま、産業工芸や生活工芸という時代思潮と重なり、軌を一にしていた。民芸とは別の視点で時代を読もうとしていたことが分かる。柏崎の活動の基盤にあったのは、人間であり、人間が生きることであり、強靱で健康な魂への憧れでもあった。この「健康」ということばの響きは民芸との関連を想起させるが、彼の中では民芸とは異なったイメージであったのではないか。

柏崎のデザイン活動は概ね次のような項目に分けて考えることができよう。

1.沖縄紅房での活動、2.理研電化工業、3.竹の編組品、4.長崎県での陶磁器デザイン、5. 筑後花筵、6.福岡特殊硝子株式会社でのガラスのデザイン、7.「かみ研」での後進の指導とデザインなどと沖縄や宮崎での活動が挙げられ、個々のデザインはもとより、地域デザイン振興の組織者としての足跡が大きい。佐賀・長崎を中心として活動が続く九州陶磁器デザイナー協会へのきっかけを作り、九州クラフトデザイナー協会(現：九州クラフトデザイン協会)設立に際して初代理事長を務め、九州デザインコミッティーの初代理事長となるなど、九州・沖縄のデザイン界の第1期を作り上げたことである。特に九州クラフトデザイン協会は40年の長い歴史を持つ。これは柏崎がデザイナーである

ことに加え、(株)岩田屋の顧問として、流通・販売の現場を指導・助言する立場にいたことと関連している。

一方、昭和27年から37年まで11回にわたる、通商産業省工業技術院産業工芸試験所と朝日新聞社が共催した「生活と工芸展」と柏崎のデザイン指導の関連も深いものがあったと指摘できよう。

「生活と工芸展」は産工試九州出張所と九州各県公設試験研究機関が住まいのデザインを家具を中心に提案し続けた展覧会であり、その第２部として公募部門があり、民間のデザイナーや企業が積極的に地域資源を活用するデザイン提案をおこなった。

「生活と工芸展」は家具・インテリア領域とクラフト商品領域に分化したと見ることができる。

更に付言しなければならないことは九州クラフトデザイナー協会設立後、九州各県の公設試験研究機関デザイン関係職員が継続的に運営して、その力に支えられていたことが指摘できるのである。

柏崎はまた大学におけるデザイン教育にも長らく関わり、多くの学生に影響を与え続けたことも忘れてはならない。

付記：本稿は2006（H18）年日本デザイン学会第53回研究発表大会、口頭発表　車政弘「柏崎栄助と九州クラフトデザイナー協会」の内容を基本にしている。

参考文献／注

1) 株式会社「紅房」社史編集委員会編、『紅房社史』、p.145、(株) 紅房、2003

2) 後藤元一、「沖縄の工芸運動 紅房漆器40年の歩みを通して」pp.28-35,工業技術院製品科学研究所編、『工芸ニュース』、Vol.41,No.2,丸善株式会社、1973

3) 比嘉明子、「紅房をとりまく人々」、株式会社「紅房」社史編集委員会編、『紅房社史』、p.125, (株) 紅房、2003

4) 柏崎栄助追悼展と出版の会編、『柏崎栄助 その個性と地場のデザイン』,p.133, 柏崎栄助追悼展と出版の会事務局、1987

5)「沖縄紅房展」商工省工藝指導所、『工藝ニュース』Vol.10,No.1,1941（S16）,

6) 後藤元一、前掲、p.30

7) 柏崎榮助、「臺灣少年工育成への課題・雑感」、商工省工藝指導所編『工藝ニュース』Vol.12,No.5,p38-39,工業調査協会,1943（S18）

8) 小池岩太郎、「臺灣の生活工藝」商工省工藝指導所編『前掲』Vol.12,No.5,p39-40,

9) 森正洋・車政弘監修、小田寛孝編『九州クラフトデザイン協会40周年記念事業「森正洋さんに聞く会」の記録』P.3, 九州クラフトデザイン協会、2002

10) 柏崎栄助追悼展と出版の会編、『前掲』p.132-133,

11) 比嘉明子、「紅房をとりまく人々」、株式会社「紅房」社史編集委員会編、『前掲』、P.124,

12)「ウヰン・ベルリン・パリ (一) 沖縄工藝品盲調査　工業指導所嘱託　柏崎栄助」の見出しの記事には、次のような記述がある。「此方の美術學校であの世界的建築家ホフマン教授にお目にかかれた事は何より嬉しく、白髪の教授が大きな手を通して傳はる激勵には自然目頭が熱くなるのを感じました。持參の本縣指導所製品の漆器に小品を差上げて來ました。」とある。琉球新報昭和13年1月28日

13)「ウヰン・ベルリン・パリ (四) 沖縄工藝品盲調査　工業指導所嘱託 柏崎栄助」の見出しの記事には、次のような記述がある。「持参の漆器は僕の仕事の化粧、モードの一流所に配付してあります。」とある。琉球新報、昭和13年1月31日

14) 後藤元一、前掲、p.30

15) 柏崎栄助、「表情・化粧・結髪」、柏崎栄助追悼展と出版の会編『前掲』pp.44-47

16) 東京国立博物館他編、『2005年日本国際博覧会開催記念展　世紀の祭典万国博覧会の美術　パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品』国際博覧会年表p.283,NHK NHKプロモーション日本経済新聞社、2004

17) 柏崎栄助追悼展と出版の会編、『前掲』、p.133

18) 国内ニュース欄「第２回生活と工芸展」『工芸ニュース Vol.21.89』(p.39)、1953 (S28)

19) IAI九州出張所　松田一雄、剣持仁、那賀清彦、「第4回生活と工芸展」『工芸ニュース』Vol.23,No.6,pp.16-17,1955 (S30)

20) IAI九州出張所　松田一雄、剣持仁、那賀清彦、「前掲」p.18

21)「第５回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.24, No.5, p.37, 1956 (S31)
22)「第６回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.25, No.4, pp.49-50, 1957 (S32)
23)「第７回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.26, No.4, pp.60-61, 1958 (S33)
24)「第８回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.27, No.3, pp.48-49.1959 (S34)
25)「第9回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.28, No.4, pp.52-53.1960 (S35)
26)「第10回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.29, No.4, p.55,1961 (S36)
27)「第11回生活と工芸展」、『工芸ニュース』Vol.30, No.1, p.60,1962 (S37)
28) 柏崎栄助「私の竹の仕事」『美術と工芸』Vol.3, No.12, pp.33-34,1948
29) 塩塚豊枝「KCDA発足の頃」柏崎栄助追悼展と出版の会編、『前掲』,p.88,
30) 青木史郎、「デザイン行政・振興の歩み」日本デザイン学会編『デザイン事典』p.550、朝倉書店、2003
「昭和30年当時は、輸出による外貨獲得が大きな行政テーマであったが、機械工業などは敗戦の痛手から回復していない状況にあったため、手工業品、軽工業品の輸出が当面の課題となった。アメリカの工業デザイナー、ラッセル・ライトから日本の手工芸品をアメリカに輸出するプランの提案があり、これにもとづき、外務省、通産省、日本貿易振興会、日本生産性本部などが委員会を作り、具体的な事業に着手した。この「ラッセル・ライト計画」と呼ばれる事業が、地域の産業を対象とするデザイン振興活動の出発点となった。」
31) 協会のあゆみ 歴代理事長　柏崎栄助、九州クラフトデザイナー協会ニュース、復刊第1号、p.3,1971
32) 田中吉定「第30回九州クラフトデザイン展を祝す」九州クラフトデザイン展第30回記念出版編集委員会編、『九州のクラフト　KCDA九州クラフトデザイナー協会30年の歩み』、1992
33) 第1回九州クラフトデザイン展（福岡展）開催要綱、1962 (S37)
34) 源　弘道、「気になるサロン化　原点に帰り、問い直せ」朝日新聞1972 (S47) 年3月24日
35) 田中忠興、「柏崎栄助と筑後花筵」柏崎栄助追悼展と出版の会編『前掲』、p.98
36) 森正洋、「出合い」柏崎栄助追悼展と出版の会編『前掲』、p.80
37) 柏崎栄助著・増田正次郎編、『沖縄日記』、pp.11-12,葦書房、1989